

平成21年度 厚生労働省障害者自立支援調査研究指定事業
障害者アートを活用した障害者の自立・社会参加に関する研究プロジェクト
第2回製品開発委員会 会議要旨

- 1 開催日時 平成21年10月9日(金) 午前10時～12時
- 2 開催場所 広島市立大学 本部棟 2階 大会議室
- 3 出席委員 4名
大井健次委員、吉田幸弘委員、木村成代委員、田中真弓委員
- 4 事務局 4名
NPO法人ひゅーるぼん事務局：川口隆司、本田真輝子
広島市立大学担当者：中村圭、今井みはる
- 5 議題 1) アート製品開発コンセプトについて
2) アート製品開発体制とスケジュールについて
3) その他
- 6 会議資料 資料1) 障がい者アートから発生する「もの(製品)」の形態について
資料2) 障がい者アートを活用した製品の開発スケジュール
その他) 第1回製品開発委員会議事録

7 会議要旨

【議題1「アート製品開発コンセプトについて」】

(吉田幸弘委員長)

では第2回製品開発委員会を始めます。議事次第に基づいて進めていきたいと思っております。まず初めにアート製品開発コンセプトについて。これは事務局の方から何か補足はありますか。

(事務局)

はい、資料1『障がい者アートから発生する「もの(製品)」の形態について』なのですが、前回の委員会で3つに分類いたしました。今回もっと深く考えていきたいと思っております。アートそのものが製品となる陶芸製品やさをり。さをりにつきましては、ご存じない方もいらっしゃいましたので資料を用意しました。障がい者の関わりでいいますと、100%障がい者が関わる、最初から最後まで障がい者の方がつくる製品となります。自立という事に関し、研究内容に値する事でいいますと「アートの価値への依存性が高い」次に「現時点では収益性が低い場合が多い」そして「近年その価値の高まりとともに収益性を高めている」しかし「大量生産ができないため、一製品あたりの収益性を高くする必要があります

前回のシャレオでの展示販売にあった陶器の製品や『アトリエやっほう!!』さんの陶器で出来た電車の商品がありまして、いずれにしても1,000円以下の場合が多いのですが『さをり』に関しましては近

年その価値の高まりとともに収益性を高めております。『さをり』というのは『布』なのですが、今、ファッションデザイナーの目に留まり使用されています。3枚目の製品なのですが、すごく売り上げもよく『さをり』の生産が追いついていない状況だそうです。『さをり』を織る方々『さをり塾』に所属されている方は全国にいらっしゃるのですが『さをり』の販売協同組合に入ってらっしゃいます。そこで、全国の施設で創られた『さをり』がデザイナーに販売され、縫合されて新たな商品となり販売されていくという仕組みが生まれてきております。ただ、アートそのものが製品となる場合は大量生産ができないため、一製品あたり収益性を高くする必要があります。しかし、一部だけで全体的にはなっていないという現状です。

次に、アートそのものの延長線上にある製品ですが絵はがきや複製画などがあげられます。こちらは制作過程に特別なアイデアや工夫が必要ないというメリットがありまして障がい者のアートを、そのまま利用することができる、というメリットはあります。アートの認知度や評判に依存することになります。そこで今回認知度や評判を高めたいと申しましたが、それがこの部分にあたると思いますが、アーティスト自体の認知度・評判が必要で、それらがなければなかなか販売に結びつかない場合が多くあります。

それから、アートをTシャツやマグカップなど既存の「もの」に取り入れて製品化したもの。これは従来、施設や作業所で行われているものですが、アートを使うターゲットとなる製品選択と、そのデザインの洗練度に左右されてしまいます。実際に、作られている製品もありますが極めて洗練された製品というのは無いに等しい状態です。市場づくりや販路開拓も重要と明記しておりますが、今度、視察に伺う『アトリエ・イン・カーブ』さんですが、ここはこだわって製品づくりをされており、美術館のグッズ販売など展開され成功されているところです。

最後に、アートの魅力と製品開発者（デザイナー）の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものとありますが、例としてなかなか当てはまるものがなく、本プロジェクトで制作という書き方をしました。この形態に関しましては、障がい者とデザイナーなどの製品開発者との協働の中で生み出されるものになります。皆様のご意見等をお聞きしながら決めていただきたいのですが、2.3番余力があれば1番を目指していくのが大切なのかと事務局として考えております。ポイントなのですが、製品開発するにあたってのキーワードともいえますが、『障がい者自身の意思の反映』で、表でいいますと1番または2番で出てくるものですが、1番では二重丸で障がい者の方の意思が大いに反映されているものだろうと、思われがちなのですが一方で、そのつくるという目的以外は制作者（デザイナー）が持ち込む場合が多く、障がい者の方に任せてしまう場合が多いのが現状です。障がい者の方に仕事として型紙などを使い創られている。そして障がい者の方は休憩時間に、仕事で余った材料で自分自身が創りたいものを自由に創ったりされ、好きなように創った物が、仕事で枠にはまったものを創ったものよりも面白いのではないかと、という方もいらっしゃる、そこで発掘をされる場合もあります。アート性をどこまで追求していくか、というのも課題になるかと思えます。そして、『ものづくりへの関わりの度合い』という事なのですが、ここで一番成功されているのは『さをり』だと思うのですが、型を創られて進められている方法と、作品として創られるパターンがあります。作業としましては5.6分割にしてそれぞれ分業化して関わる。またはデザインの中に自由に創ったものを取り入れて『これは面白いものができた』というような事も現場では行われているようです。3つ目は、自立性という事では、製品が売れていくと自立に繋がると思うのですが、収益が施設に入ってしまう場合が多いのが現状です。『アトリエ・イン・カーブ』さんでもこの課題を取り上げられていたが、A B C D E さんが居たとしまして、A B さんは売り上げはあるけど C D E さんの売り上げが少ない場合、通常では A B さんに収益が入りますが、ここでは A B C D E さんに売り上げを均等に分けるようにされています。いい作品を創ったからといって、いい評価を得られない場合もある、という事です。社会参加度では、製品が販売され利用されると社会参加していくという事になると思いますが、行程の中で周りに居る人たちの思惑などがある場合は、障がい者本人の認識が持てない場合があります。そうなりますと、商品は売れていくが本人の認識がなく社会参加している意識がない状態になってしまいます。以上を踏まえて進めたいと思います。

（吉田幸弘委員長）

ありがとうございました。形態では1.2.3とありますが、今回のプロジェクトでは3番、一番下のものを検証したいと思います。アートの魅力と製品開発者（デザイナー）の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものを基軸として開発できないか、という事です。例というものが無いので意見

も進まないと思います。この事も含め先日、話し合いました。その中で具体案を提案させていただきたいのですが今後の製品開発で関わってもらおう広島市立大学 デザイン工芸学科 非常勤勤務の和気くんです。

(和気さん)

只今、ご紹介にあずかりました。デザイン工芸学科 非常勤勤務の和気です。具体例ということなのですが、僕は、前回のシャレオでのイベントを觀まして、これは可能性があるなあと思いました。ひとつひとつの作品が力強く感じ取れるものがありました。ただ、それをどうやって製品化するかという事ですが、単純なものではプリントTシャツやマグカップなどがありますが、障がい者の物だから支援としてというようなことでしか繋がらないと思います。それを障がい者アートがそのまま、障がい者アートの素晴らしさが伝わる製品はないかと思いましたが。そして障がい者の方に是非つくって欲しいというものがありまして、それがこの魚釣りのバス釣りのルアーなのですが、これはキーホルダーサイズなので実物の半分くらいの大きさです。実際は8~10cmくらいのものになります。魚釣りのルアーというのは、必ずしも小サカナに似ているから釣れるというのではなく、例えば、バス釣りで一番釣れたのは何かと申しますと、ルアーでもなんでもないバドワイザーの瓶の模型、小さなものに釣り針をつけただけのものが一番釣れたということです。というように自由な世界なんですね。でするので可能性を持っているものなのでルアーという形の中でひとつの決まったフォーマットで制作してもらったら、ルアー釣りをされる方、世界が注目することになるかもしれない可能性があると思います。このルアーは岡山に在住のルアー作家の作品なのですが、彼はただ、サカナの形に似せるのではなくて、模様も幾何学的な模様やスイカの模様等、本当に自由なデザインをされています。例えば、ショッキングピンク一色のデザインなど、よく釣れるルアー作家として有名なのですが、そういう世界に対等の立場で入ることができる可能性のあるものです。

(吉田幸弘委員長)

はい、ありがとうございます。この他にも何点かアイデアが出ております。このアイデアを実際に製品化するかどうかという事ですが、障がい者の方と一緒に製品開発をしていくということが製品の開発スケジュールにも書いてありますが、ワークショップを行い製品化していったらどうかということなのですが、いかがでしょうか。

(大井委員)

ルアーというのは、サカナの種類、大きさや海や川などによっても違ってくるものなのですか。

(和気さん)

はい、条件はあります。釣るサカナによってルアーの重さや大きさ等変わってくるんですが、何種類か分かれていまして、後は個別に形が変わっています。本当の小魚よりも釣れたりする場合があります。そこで奇抜なデザインをしていただけたらと。

(大井委員)

障がい者が限られた枠の中で、密度・クオリティ・創造性などを表現できるのでしょうか。形も含めて全体的な完成は可能なのでしょうか。

(和気さん)

形は、初めに創っておきます。そして形が出来ているものに描いていただく、と。最終的には形も作る作業までやっていただきたいのですが。

(大井委員)

釣りをやられる方の要求度という物は高いのですか。

(和気さん)

そうですね。全く今までにない市場ですので何ともいえないのですが、毎年新作も出ていますし、他、アクセサリ用としての商品も作られています。

(吉田幸弘委員長)

どうでしょうか。皆さん、では今までの説明についてご意見、ご感想はありますか。

(木村委員)

26日についてなのですが、この予定はもう決まっているんですね。

(事務局)

はい、1回目は『ぼんぼん』が広島市立大学さんに何う予定となっております。

(木村委員)

それから、形を決めておくということでしたが、例えば粘土などで障がい者の方に形を自由に創ってもらうのはいかがでしょうか。その中からルアー作家さんに、いいものを選んでいただき形成していくのはどうでしょうか。

(和気さん)

そうですね。基の形は創っておきたいのですが。着彩をしていただくようになります。

(吉田幸弘委員長)

ええ、ルアーというものは形も十分な要素だとは思いますが、色、色彩なのでしょうね。それが、僕たちが考えると本当にリアルなサカナを創ってしまうんですが、サカナから見るとそういうものではないものの方がよく釣れたりし、障がい者の方のアートと通ずるものがあると私は思いました。

(木村委員)

そうなんです。以前『アート・ルネッサンス』で粘土を握って小さなお地蔵さんを創られている方がいらっしゃるのですが、そういうように握って形をつくる事が楽しい方もいらっしゃいます。そういう方に形の制作も楽しませてあげたいと思うのですが。

(吉田幸弘委員長)

ただ、これを実際につくる製品にするとすると、本当にサカナが釣れるものなのか検証実験を行う必要があるんでしょうね。

(事務局)

私共、事務局としましては3番をつくるとなるとどういうものがあるのか。2番の製品形態でデザインの洗練されたものを創っていくのもの、実用的な物を創っていくというのが頭にあったのですが やはり3番 アートの魅力と製品開発者（デザイナー）の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものを実際、創っていくとなるとどのようにしたらいいのか考えまして、まずは現場に来ていただきました。そして色々な想いをお持ちになられて帰られたんですが、やっぱり肌を合わせてみて考えていかないとアイデアは浮かばないのではないかと感じました。先ほどのルアーですが、手始めとしてやってみましょうというお話になりました。その中で本当に、双方の肌が合って融合し生まれていくことが出来ないかと期待しております。

(吉田幸弘委員長)

テーマやアイテム等、そういったものをある程度決めて、その中には今募集をしている物の中からピックアップしてワークショップに出し、試して製品に繋げていくという形式で行きたいと思います。

(大井委員)

検討委員会からのアンテナ商品となるようなものを創っておけるといいですね。

(吉田幸弘委員長)

あの、前回の委員会議事録でありましたが、基町高校の生徒さんが応募してくれたカチカチと絵が替わるボールペンと云うアイデアがありこのアイデアもアイテムになるんじゃないかと思います。

(事務局)

そうですね2番、アートを既存の「もの」に取り入れて製品化したものの分類になり、前回の委員会でも田中委員の方からご提案いただいたのですが、ホテルのタオルなどのアメニティセットなど洗練されたものの製品化も外せないものだろうと思います。また、洗練度といいますか現場のものが考える事が出来ないといえますか、企業さんとコラボレーションする経験というのがなかなか少ないので、今回プロジェクトの結果の中で示してしていくという事も大切なのではないかと思います。3番のアートの魅力と製品開発者（デザイナー）の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものを創造するにあたり、広島市立大学を中心としたチームの参考出展作品としてのアイデアを提示するという事。2番の製品形態でデザインの洗練されたものを創っていくのものの部分に付きましてはご応募いただいたアイデアを洗練させていく二本立てで行く事はどうかと思います。今井先生、中村先生もいらっしゃいますが、次回、2回目のイベントの事も考えていかななくてはいけないこともありますので数というのも必要だと思います。イベントで何点出展するかですが、3番の形態で3点くらい、一般のアイデアから3点くらい。そしてペーパーや映像などで示すような形でイベントが開催されると思います。

(吉田幸弘委員長)

一般のアイデアをいただいた中から3番アートの魅力と製品開発者（デザイナー）の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものでもいいのですか。

(事務局)

それは、いいと思います。

(吉田幸弘委員長)

その辺は多面的に考えていきたいと思います。

(田中委員)

今、具体的にお話が進んでいると思うのですが『ルアー』がどのくらい売れてどのくらいの売り上げがあるか等はこれから調べられる感じですか。

(和気さん)

すぐ、判るかどうかなのですが 個人で制作されている作家さんなどにあたり販売ルートなり調べてみようと思います。

(田中委員)

チャンネルを幾つか探して、個人となると販売にも限界があると思います。私だったら、ルアー市場がどのようなのか、現在のルアー利用人口がどのくらいあるのか調べ、現在の出来る限りのことを行います。今、お店に置いてあるルアーはどういうものなのか？置いていただけそうなお店など出来る限り調べたりし、更にデザイン費や労働費をペイできるだけのロット数、数字を出して大まかな収支計画を提示し、目標数は売るということを行えるよう計画する事をデザイン制作と並行して行うといいと思います。

(吉田幸弘委員長)

それは、第2回イベントの終了後では遅い、難しいでしょうか。そういうチャンネルを持った方に案内状を出して、12月のイベント期間中、積極的に動いてもらってそれからでは遅いでしょうか。

(田中委員)

デザインを進める上で、やっぱり今有るデザイン前知識を持って創らないと、今有るデザインと同じ物を創っても意味がないと思いますので、今こういうものがあるんだと調べておく必要があるんじゃないかと思います。

(大井委員)

ある程度、制作する製品のデータを揃えておくということですね。例えば、大手の市場に乗せた方がいいのか。あるいはマニアックにネットで販売するようにしたらいいのかなどあると思いますし、大きな企業であれば『消費者支援』というものが有り自社ブランドを含めてつくるという意味で、こういうものを追加するのはどうですかというようなアプローチもあると思います。

(田中委員)

実際に出来た物でないと、置いてもらったりするのは難しいと思いますが、釣り具店さんなど思うのですが、ただどのくらい販売できる企業とかネット等あるのか調べていただきたいと思います。

(大井委員)

日本国内でも、海外でもという事ですね。解りました。

(事務局)

そういった意味で、田中委員がご存知の製品の中で『こういったものが面白いんじゃないか』というようなものがありましたら是非、お聞きしたいのですが。

(田中委員)

例えば、ツールとしてアマゾンとかだと色々な製品を取り扱われていていいと思いますが。製品としては今、ちょっと浮かばないので考えておきます。

(大井委員)

今回は3番のアートの魅力と製品開発者(デザイナー)の力を融合させて新たな機能を持つ「もの」として高められたものを創っていく予定ですが、何か面白い刺激的な物を創ってそれから広がりをもち、その広がりから障がい者の方のアートが作品と製品とが融合していくようになると思います。やはり作品だけで押していくのは難しいことだと思います。障がい者の方も、我々健常者も共同で自立という事を考えていくところだと思います。物を創っていくという、物を創っているという事を確立していくという事を、実験的に協働で何かを創ろうと話している事は大切ですが、この土壌をどのように運んでいくかという事も考える必要がある。日本にも世界にもこういうものはなかったというような勢いで製品を開発していきたいと思います。

(事務局)

障がい者の方で『ルアー』を使った事のあられる方はいらっしゃるのですか？

(事務局)

障がい者の方は『ルアー』がどういうものか、という事をあまり知らないかもしれませんね。逆に知らない方が面白いものが出るのでは思うのですが。私の施設へ先日、ハンガーを沢山持って来ていただいた方がいらっしゃいまして。するとみんな落書きを始めまして、それが結構、配色が面白いハンガーが出来上

がったんです。そしてハンガーを持っていらっしゃった方が後日いらっしゃって『これは凄い！』と仰っていただきまして。『これは買いたい！』と仰っていただいた事がありました。

(吉田幸弘委員長)

今のような話で、進めていけたらいいかと考えております。ワークショップも2回3回と言わずに、もう少し回数を行いたいと思っているのですがいかがでしょうか。

(木村委員)

ワークショップなどはやられた事はあるのですか。

(事務局)

目の前に物があると、描いてみようかなあというようにはなると思います。以前、障がい者アートをどのようにすすめていくといいかをテーマとしてアートサポーター講座という事をおこないました。障がい者の方が目の前で絵を描いて、それを支援する方がその様子を見てどのように支援していくかという事を考える場づくりをしたのです。ところが、描かれる方は、描かれるんですが、別の方は『なんだ？これは？』と、ドギマギしてなかなか描けないという状況が生まれました。やってみないと判らないんですが、私共の施設で動物の絵を描かれる方がいますが、描かれる時は描かれるんですが、その日の朝、嫌な事等があると一切描かないという時もあり『どうしたの？』という所から始まって『では、描こうか』という時にはお昼になっている状況もあります。ですのでこの2.3時間のワークショップ中でどのように心を通わせていくかという事ですが、気持ちの融合は大切だと思います。『ぼんぼん』へ、アーティストの方が一緒にアートをやりたいとボランティアに来ていただいたりしています。最初はお客さんのような扱いなんですが、段々融合されていくのが感じられます。

(木村委員)

融合されるのにやっぱり、時間はかかるものなのですか。

(事務局)

時間がかかる方もいらっしゃいますし、すぐ打ち解けられる方もいらっしゃいます。

(吉田幸弘委員長)

そこで、第1回目は大学でおこなうといいのではないかと考えまして。やはり環境が変わると作品・絵なども変わってくる可能性がありますから。

(事務局)

変わってくると思います。『ぼんぼん』の皆さんも大学に行かせていただける事をとっても楽しみにしております。やはり、私の施設の中で自閉症で絵を描く方がいらっしゃいますが私の子ども達の施設『じゃんけんぼん』へ来る機会がありましてそこで子ども達が『しりとり』を絵で描いているのを見ました。それを見て大人の自閉症の方が3名、普段はお互いにコミュニケーションがとることができないのですが、その3名と一緒に『しりとり遊び』を始めたのです。結構、環境の刺激が作用して障がい者の方のアートも面白い事になるのではないかと思います。

(吉田幸弘委員長)

その『しりとり』というのは、我々がやる『しりとり』と全然違うものなのですか。

(事務局)

はい、全然違います。例えば、『る』という言葉などなかなか出てこないですね、それが『ルイボスティー』だとか、普段知らないような鳥の名前が出てくるのです。彼らの中にはその辺の知識が深い人もい

て、鳥の名前でも学術名で出てくるのです。電車が好きな方は『電車の名前』が次々と出てくるのです。『○○何号』などですね。互いに影響されない関係で『しりとり』が続くのです。

(吉田幸弘委員長)

以前、事前に話している時に塚本君の方から『写真集』のアイデアがありましたよね。『大人の視点』と『障がい者の視点』という案。『ぼんぼん』さんへ伺った時に、写真を撮られている方がいらっしやいました。携帯で年中写真を撮られている方がいらっしやいまして、見開きで同じものを障がい者の方が撮られたものと、プロが撮られたものが載った写真集。『しりとり』をテーマにした『写真集』も面白いかもしれませんね。障がい者の方がやられる『しりとり』を『写真』に撮り【障がい者とプロ】写真集にするというアイデア。終わりが無いのかもしれませんが。

(事務局)

そうですね。

(吉田幸弘委員長)

後、昨日 塚本君の方から『クッキー』の話が出ました。なかなか売れないとお聞きしましたがワークショップで『クッキー』もテストしてはどうかと思います。動物のシルエットといいますか型枠を創りまして、それで型をとり焼くというのはいかがでしょうか？

(大井委員)

先ほどから出ております『ルアー』『写真集』『クッキー』などを広島市や大学などで支援していただける事は出来ないでしょうか？ 例えば私共の大学でオリジナルグッズなどに出来ないでしょうか？ ホームページ上でいつも載せてアピールするのはどうでしょうか。大学グッズを創りたいという案が以前から出ているのですが、なかなか巧くいかなくて進んでいない状態であります。そこで大学が参加して創っていることもあるので製品化することは可能な事だと思えます。今、企業へ向けてだけの考えになっておりますが『ひろしまブランド』の扱いを大切にやっていかなくてはいけないと思えます。ギャラリーGさんの特別企画などは難しいでしょうか？ そのように色んなところでアピールし進展する事を健常者が考えなくてはいけない問題だと思えます。シャレオさんでのイベントでも延長するようなものに出来るといいですね。

(事務局)

シャレオ中央広場に、『いけす』でも作り魚を釣る構造もいいかもしれませんね。

(大井委員)

カラフルなものや、形の面白いものが沢山並んでるだけで刺激的なものになると思います。

(事務局)

『ルアー』に関して一言言わせていただくとしますと、もともとのパーツ資料1では2番アートを既存の「もの」に取り入れて製品化したものに近いと思います。ただ、アートに対しての評価は通常人間がするものなのですが、これは『サカナ』が評価【釣れるか釣れないか】するということが入ってくることで面白い部分ではあります。ところで以前に『花』を育てられているとお聞きしましたが、その時に使われる『農具』など人と自然が繋がると思えます。カフェ・ギャラリーを『ぼんぼん』さんはやられているのでそういうところでも巧くリンクすることは出来ないかと、メッセージも込められるので良いかと思うのですが社会参加という意味で難しいですかね。

(事務局)

私共も考えた事がありまして、障がい者の方が作った物が日常にあると楽しいだろうなと思えました。一方で収益性ということも考えまして施設や現場では手が出しにくい。その中でも『鉢』というものを考え

ていました。『鉢』と『受け皿』。『受け皿』は決まったものがあり、そこへアートが入ると面白いだろうなと発想した事があります。

(木村委員)

障がい者の方の程度も様々で、私たちの解らない世界です。しかし、絵を描いて褒めてもらうという事は健常者も障がい者も同じで嬉しい、そして商品が売れていくという事は社会参加にはならないかもしれませんが『嬉しい』と思います。『ルアー』というものは取っ掛かりとしてすごく面白いものだと思います。今まで紙に描いていたものが障がい者の方の日常から離れてものに描き、誰がそれに対して何か言ってくれるという事は非常にいい事だと思います。

(事務局)

例えば、『ルアー』を作るとしまして障がい者の方の作った『ルアー』で釣れた魚の写真などを本人が見る事が出来ると、障がい者の方にも実感として解っていただけるかもしれませんよね。

(木村委員)

そうですね。そういう具体的なものがあると障がい者の方も社会参加しているという意識がもてるのかもしれませんがね。ただ、展覧会をして人が来てくれているのが嬉しいというのは違うと思うのですね。障がい者の方はイベントでアートを行っている意識というものは無いと思います。

(吉田幸弘委員長)

制作者と障がい者、そしてユーザーの関係性があると思うのですが、自分たちで作りそして実際に使ってみるのもいいと思います。例えばレストランなどスプーン、フォーク、ナイフなど色んな種類のものがあると思うのですが、自分たちで作ったもので絵など描いてあると、これがサカナのフォーク、これが肉のナイフ、これがスープのスプーン、これがデザートフォークなど判りやすいと思うのですが。これは、今回募集した案の中にもありました。そこで、他のアイデアを見ていませんので、現時点で集まっているアイデアを見たいと思うのですがいかがでしょうか。公募〆切りが10月31日ですがそれから全部をチェックするとなりますと同時進行のワークショップもこともありますので、ある程度、集まっているアイデアについてチェックしピックアップして抽出したいのですがいかがでしょうか。

(事務局)

今度、視察も入っていますし 色々施設を見ていただいてからとも考えていたのですが本田さんの方で『穴吹デザイン専門学校』さんのアイデアをお預かりしておりますのでご説明を。

(事務局)

はい、『穴吹デザイン専門学校』の生徒さんのアイデアをお預かりしております。正確な数は出していないのですが100枚と少しあるかと思います。

(吉田幸弘委員長)

それでは、皆さんからご意見やご感想はないでしょうか？集まった案はデータ化し委員の先生方にメールしていただけますでしょうか。それから厳選しワークショップでテストしプロタイプに進めていきたいと思えます。まずは今あるアイデアをザッと皆さんでチェックすることにしましょう。

(事務局)

以前、ぼんぼんの現場で『鉢』と『受け皿』が繋がってデザインされているものができるとう面白いうね。という案は出ました。

(大井委員)

ぼんぼんでは、『種』の販売はされているのですか。

(事務局)

『種』の販売はおこなっておりません。

(和気さん)

『切り花』でも『鉢植え』でも携帯できるような小さいものとかはないんでしょうか。

(事務局)

そうですね。小さい物は、今は作っていません。

(和気さん)

たまに『花』を育てたいと思うのですが 一人暮らしなどで、あまり家に帰れないので可哀相なので躊躇しています。携帯できる『花』があると、嬉しいと考えまして。

(木村委員)

ハーブなどは作られていないのですか。鉢植えでいいのですが。今は、決まった種類の『花』を育てられているのですか。

(事務局)

そうですね。季節季節で一番人気なもので好まれる色の『花』を育てています。

(木村委員)

『ハーブ』とか結構、人気なのではないのですか。

(事務局)

そういう風に皆さんいわれるんですが、そうでもなく一番よく売れるのは『花』なのです。

(木村委員)

スーパーなどで売れそうな気がするのですが。

(事務局)

スーパーは1つの鉢に対して、収益が5割以下だと聞きます。市場では1ポット5円で取引されています。飲食店では『西洋野菜』を作ってはどうか、という話がありました。

(田中委員)

私達ホテルで出す『野菜・ハーブ』なんですが出来れば新鮮なものを出したい思いもありまして自分たちで作りたいのですが、なかなか場所もなく『野菜・ハーブ』でしたら他のホテルや飲食店さんも需要があると思うのですが。

(事務局)

そうですね。少し考えたいと思います。

(木村委員)

受注はどのようにおこなわれているのですか。自分たちでやられているのですか。

(事務局)

基本的には電話注文が多いです。

(田中・木村委員)

『ハーブ』はいいと思うんですが。

(吉田幸弘委員長)

どこも、『ハーブ』はやられていないのですか。

(事務局)

私の知る限りやってらっしゃる施設を知りません。『ハーブ』は以前作ったこともあるのですが、水をやらなくても育っていくものもあります。育てやすいということは、自分達でも作れるということだから、収益に結びつく事業として成り立たないと言うことかもしれません。

(吉田幸弘委員長)

『花』を育てるにあたり、何か特別なことはやられているのですか。

(事務局)

私共の近所で『トマト』にクラシックを聴かせながら育てられているところがあるんですが、『普通のトマト』と本当に味が違うんですよ。『花』も普通の方は、さっと作業するところを障がい者の方達は『花』に声を掛けながら育てています。

(田中委員)

そういうのはキャッチコピーとして使用できないのでしょうか。

(事務局)

キャッチコピーとしてはうたっていないのですが、皆さん一度買われた方は『なぜ、この花は枯れないんですか?』と聞かれる方はいらっしゃいます。

(吉田幸弘委員長)

何か特別な肥料など使用されているのですか。

(事務局)

もちろん、土などある程度工夫はしていますが、とてもいい肥料を使用している、ということはありません。障がい者の方々が大切に育てられているということだけです。

(木村委員)

そこをもっと、キャッチコピーとして前面に出した方がいいと思いますよ。

(事務局)

もちろん、そういうことはやっているのですが、ぽんぽんの場合『花』を販売すると、今のところ一気に売れてしまうという状態なので…。

(吉田幸弘委員長)

マンション等、色んなところに販売できないものなののでしょうか。

(事務局)

マンションへ販売しようとした時に、『土』の問題がありました。直植えができてにくいので、鉢の土がばらけてしまうとか、水をやり過ぎてしまうとかと管理が大変ではないかという問題です。水やりが容易で、土もばらけないものというものを探していたら、人工的に作ったセラミック培養土がありました。保水性

があるため、頻繁に水をあげなくてもよく、風が吹いても砂埃が立たないのでセットで販売しようかなど考えています。

（和気さん）

やっぱり結果が出るまで長いスパンがいるので、難しいでしょうかね。

（事務局）

そうですね。毎日のことなので、昨日のように台風など来ると障がい者の方々も気が気でなくなったりされます。夏の35度の日、ビニールハウスの中は50度くらいになります。しかし障がい者の方は汗だくになりながらも一生懸命スタッフと作業をされるのです。そのようなことが『花』に反映しているのだと思います。

（吉田幸弘委員長）

それでは、そろそろ時間も参りましたのでアイデアは番号をふってデータ化し、委員の皆さんへメールしていただけますでしょうか。委員の皆さんは期日までにご返答いただいてワークショップを含め進めていきたいと思えます。だいぶん先が見えてきて少し安心しているのですが、今後のスケジュールなのですが。

（事務局）

ワークショップでテストしながら製品化へ向けて、まずはプロトタイプをつくるという形態で進めてまいりたいと思えます。まず1回目のワークショップは10月26日（月）広島市立大学さんでおこないます。後、2回3回と開催したいのですが予定が決まり次第、皆様にはお知らせいたします。審査会の件ですが

11月初旬に審査だけの為に集まっていたくのもいけないと思えますがいかがでしょうか。

（吉田幸弘委員長）

応募〆切りが10月31日ですよね。アイデアやアートをまとめなくてはいけないと思えます。ワークショップのテーマで決めたもの【テスト製品】を自動的にプロトタイプへ進行させていきますか？賞等のようなものはないのですよね。

（事務局）

賞は今のところありませんが、製品化すると決まった方へ表彰することは可能です。

（吉田幸弘委員長）

1回目のワークショップの前に一度お集りいただいた方が宜しいですか。

（事務局）

それは日もないので難しいかと思えます。ですので決めた点数でいいアイデアをそれぞれの委員の皆様で決めていただきメールで受け集計し吉田委員長でまとめていただくというのはいかがでしょうか。事務局からは以上です。ワークショップの件ですが委員の皆様は自由参加ということで宜しいですか。

（吉田幸弘委員長）

はい、結構です。時間等をお伝えしておきましょう。10月26日（月）13:30～16:30場所は3D工房にて行ないます。プログラムにつきましては後ほどメールにてお知らせいたします。それではここまでの中でご意見等はございますか。なければ本日の会議は終了致します。皆様ありがとうございました。